

人・ヒグマが安心して暮らせる地域へ —ウィズベアーズを考える—

幾島奈央 北海道放送報道部記者
小川巖 エコ・ネットワーク代表
坂田一人 札幌市環境局環境都市推進部熊対策調整担当係長
佐藤喜和 酪農学園大学環境共生学類教授
押谷一 酪農学園大学環境共生学類教授・当研究所理事

座談会にあたって

押谷 本日はお忙しいところお集まりいただき、ありがとうございます。近年、道内では市街地へのヒグマの出没が相次ぎ、自治体における課題の一つとなっています。私たちが住む北海道はヒグマと共生している地域でもあります。そこで、今日は人とヒグマが共存・共生するためには何が必要かを議論していただくため、皆さんにお集まりいただきました。

北海道に住んでいてもヒグマの生態について知らない人は多いと思います。前半ではヒグマがどのような動物なのかをお話していただきます。後半は自治体におけるヒグマ対策として何が必要なのか。その部分についてお話いただきたいと考えています。皆さんよろしく願います。

1 ヒグマを知る

ヒグマの習性・生態

佐藤 北海道で人が生活し始めるはるか前からヒグマは生息しています。現在、道央圏の一六市町村には約二六〇万人が住んでいますが、ここにもかつては森林があり、ヒグマが暮らしていました。ヒグマは北海道では森林性ですが、世界的にみるとより開けた環境でも生活できる性質を持っています。食性は雑食性です。分類学的には食肉

目の中にクマ科がありますから、元々肉食動物の中から進化し、植物食を中心とした雑食性に適したのがヒグマの仲間といえます。

ヒグマは雑食性であるため、環境の変化に比較的柔軟です。かつては植物を食べながら八月から九月になると河川を遡上してくるサケ・マス類を食べていましたが、人間活動の様々な影響により、遡上するサケ・マス類が減少していくと、それを食べなくとも平気になりました。

また、人間が増えて畑作を始めとする農業が盛んになると、人が作った作物や果実を食べるようになりまし。最近ではエゾシカの数が増加し、道東方面を中心に農林業や森林生態系に様々な被害が報告されていますが、ヒグマはエゾシカ新生子や死体を積極的に食べるようになったことが確認されています。このように、環境の変化にいち早く適応できるのが大きな特徴です。

そして、札幌市のようにかつての果樹園や農地が住宅地に置き換えられ、森林のすぐ裏が住宅街というような所でも暮らすことが可能です。つまり、ヒグマは人間が近くにいても、あまり気にせず暮らせる動物で、そういう点でも人間よりもヒグマのほうが柔軟だと感じています。

押谷 ちなみに、全道にはどれくらいの数ヒグマがいるのでしょうか。

佐藤 道が二〇一二年に発表している数値では、一万頭±六七〇〇頭といわれています。全体としては増えているのかもしれませんが、道南や日高、十勝ではほぼ横ばい、むしろちよつと減ってきた

場所もあるように思います。地域によって差が出てきたと言えるのではないのでしょうか。私が二〇年間継続調査をしている浦幌町などでは、森林内ではヒグマが減ってきたと感じるほどの状況ですが、実は今までと違う場所に出没しています。

これまでヒグマが生息する場所の中心は白糠丘陵側だったのですが、それが減少し、池田町側の小さな丘陵にもヒグマが生息している状況です。しかも、これまで生息していたヒグマと遺伝子タ



イプが異なる「日高タイプ」と呼ばれるヒグマが増えています。恐らく、十勝川の河口あたりから入ってきているのではと推測していますが、そうなるまでヒグマがあまりいなかったところを通してきていることになりそうです。何らかの変化が起きていると考えて調査をしています。

押谷 ヒグマは環境への柔軟性が高く、人間の近くでも生息できる動物とのことですが、先住民族であるアイヌにとってヒグマとはどのような動物だったのか。小川さん、教えていただけますでしょうか。

アイヌとヒグマの関係

小川 一〇年以上前でしょうか、小学生でもヒグマの生態を理解できるようなビデオを作りました。その際、二〇〇六年に亡くなられた萱野茂さんにインタビューし、制作したビデオの中にも出ていただきました。萱野さんは「アイヌはヒグマのことをよく知っている。ヒグマもアイヌのことをよく知っている」「人間が一方的にヒグマを怖がるのではなく、ある意味ではヒグマよりも強いという心を持っているので、必要な時にはそれを出す。決して、ヒグマに追い立てられるような存在ではない。だからヒグマより強いのはアイヌだ。でも、アイヌより強いのはヒグマだ」と印象深い話をしていました。

確かに、ヒグマは高い知能を持つ動物ですから、人間の動きをきちんと察知して行動できる。そう

した生態を知ることが重要であるということを萱野さんは私たちに説明したかったのかも知れません。

佐藤 昔のアイヌの人たちは、自分たちが住む集落の周りにはどのようなヒグマがいるかをみんな知っていたそうですね。

小川 要するに、アイヌの人たちはヒグマに対する理解が相当あり、両者が理解しあえるというのは言い過ぎかもしれませんが、だからこそ、人とヒグマの関係が平衡に保たれていたのでしょう。ところが、今のヒトは一方的にヒグマを怖がるだけで、ヒグマを知るといふ姿勢が乏しい気がします。実際、明治時代以降ヒグマ四大事件と呼ばれる事件・事故があり、それが人々に強く印象を与えた背景はあるのでしょうか。

しかし、一〇年間以上、札幌近郊でヒグマが出没しても人身事故は発生していません。だからこそ、ヒグマを理解するとまでいかなかったも、知ろうとする機会はないのでしょうか。改めて、ヒグマの会が作成した『ヒグマノート』を読み直してみました。非常に分かりやすくまとめられていました。こうした教材が住民に広く行き渡るようにする必要があると考えています。

押谷 今の話を聞いて、先住民族のアイヌはヒグマとの共存を果たしてきたと感じました。ところが、最近では人間との軋轢が生じてきているわけですね。幾島さんは島牧村で起こったヒグマに関する問題を取材しているとお聞きしています。まず、どのような問題が起こったのか簡単に説明していただいた上で、騒動後、住民はどのような

意識を持っていったのかお教えいただけますでしょうか。

2 ヒグマ対策の実態

島牧村ヒグマ騒動とは

幾島 島牧村が全道だけではなく、全国的に有名となったのは二〇一八年七月から始まった「ヒグマ騒動」と言われているものです。庭先のゴミ箱や魚の加工小屋を荒らした結果、完全に餌付いてしまい、ほぼ毎晩、住宅地にヒグマが現れました。鳥獣の保護及び管理並びに狩猟の適正化に関する法律（鳥獣保護法）では、夜間や住宅地での発砲が禁止されているため、毎日猟友会がパトロールしていても撃てないという状態が二ヶ月間続きました。結局、仕掛けた罠にヒグマが入り駆除となりましたが、今度は猟友会に支払う出動報奨金を巡って村と議会が対立し、解決することなく二年が経過してしまいました（編集部注・島牧村では座談会后、村と議会、猟友会の話し合いがまとまり、出動が再開されています）。

押谷 ハンターの出動報奨金問題が出てきたきっかけは何だったのでしょうか。

幾島 これまでハンター出動報奨金は要綱で決めていたため、議会は報奨金がどのように定められているのか把握していませんでした。ヒグマ騒動終了直前の定例議会で、補正予算案として一千万円を超える金額が村側から提出されたことで、

議会は初めて報奨金の支払い実態を知りました。その後、ハンター出動報奨金に上限を設けた条例が議員提案で制定されたのですが、今度は猟友会が条例の内容に反発し、溝が埋まらない状態が続いています。

一人の行動で変わり始めた住民意識

幾島 私が島牧村ヒグマ騒動を取材して感じたことは、先ほど、小川さんが話されていたように、住民は怖がるだけでヒグマの生態を知ろうという姿勢が多くなかったということです。これまで山から少し離れた住宅地に住んでいた方々は、ヒグマが出没していると聞くと村に連絡し、村も猟友会に任せていました。ですが、生ゴミを外に置いていたからヒグマが来てしまったという背景を知ること、「ゴミを片付ければ来なくなる」と情報に基づいた対策ができるようになります。そうした観点からもヒグマの生態を知ることが重要だと感じました。

しかしながら一番の問題は、村がヒグマ対策を猟友会任せにしていたことだと思えます。だからこそ、村は報奨金という莫大な費用が必要となり、猟友会の人たちは本業をこなしながら徹夜のパトロールしなければならなかった。ただ、ヒグマ騒動がきっかけになって、住民から選ばれた議員が議会でヒグマ政策について議論し、お金の流れもチェックしていくという、みんなが見える場にヒグマ問題が持ち出されたことは地方自治の

観点から見ればよかったと感じています。

また、大学時代にクマの研究をしていた女性が結婚を機に、島牧村へ移り住んでいました。その方が中心になり、ヒグマ騒動をきっかけに地囃へヒグマの出た場所、その原因を書き込んだ『島牧ヒグママップ』を作り、全戸配布する活動を始めた（資料1）。この住民一人の活躍ももちろんですが、こうした活動を見聞きした村のヒグマ担当職員や村の若い住民にも変化が出てきています。この二年間でヒグマが出る前の対策と出た後の対策、その両立が必要だということに住民たちが気づき始めた状況です。

押谷 そういう意識を持った住民がいることは非常に重要だと思います。一方、札幌市は住みよい環境もあり、道内外から移住してくる人も多い。さらに言えば、人口二〇〇万人近い都市でヒグマが生息しているのも世界的に例がありません。札幌市ではどのような基本政策を考えているのでしょうか。

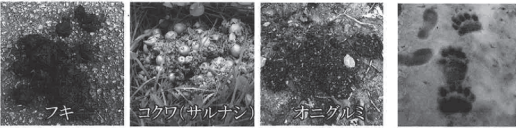
共存に舵を切った札幌市

坂田 札幌市では市民とヒグマとの軋轢を軽減し、共存を図っていくことを定めた「さつぽろヒグマ基本計画」を二〇一七年三月に策定しました。幾島さんが話していたように「ヒグマが出たから危ない」ではなく、出てくる理由は何なのか、その理由を取り除けば出て来なくなるのではないかということを経験として考えることにしました。

出会ったら、どうする？

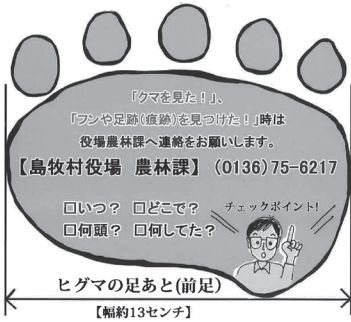
- あわてず、落ち着いて、目をそらさず(見ない)、ヒグマの移動する方向を見定め、ゆくりと距離を取りましょう。
 - 背中を向け走り逃げてください。ヒグマは、ネコ同様走るものを本能的に追いかけます。
 - 大声を出す、石を投げる等でヒグマを刺激してはいけません。
 - ヒグマの側には得難いがあります。速やかに立ち去りましょう。
 - ヒグマが立ち上がるのは攻撃ではなく周囲を確認するため。また、近距離での遭遇にヒグマが驚き、プラフチャージ(見せかけの威嚇突進)という行動をすること。
 - 極なケースですが、方が一襲われた場合には、ヒグマの日と鼻のに向けてクマスプレーを噴射しましょう。クマスプレーが無い場合は、顔面と腹部を攻撃から守りましょう。
- 一番大切な事は出会わない事です。ヒグマの生態を正しく知り、遭遇を避けましょう。

食べたものによって違うフン



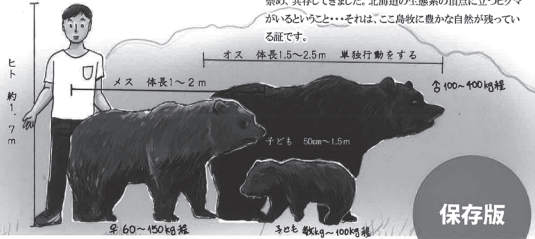
足跡

*足跡を見つけた場合は、横幅のサイズを測ろう。
 十四センチ以下はメスカ子でも、それ以上はオス、個体識別のためデータになります。シグマの毛がついていたら封筒に入れて役場農林課へ届けるなどDNA鑑定が可能になります。



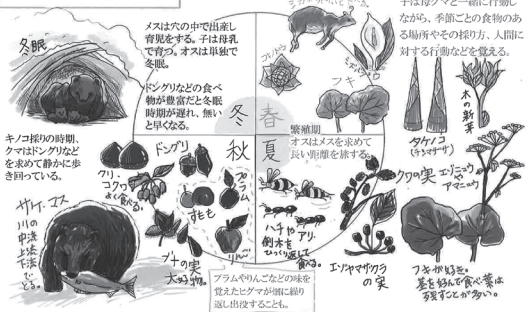
しままきの Spring 2019

ヒグマをもっと知ろう



保存版

ヒグマの暮らし



山で出会わないために

- 声を出す・手を叩く・鈴を鳴らすなど音を出すことでヒグマに人の存在を知らせ、ヒグマとの遭遇を避けましょう。
- できるだけ複数人で行動し、単独行動は避けましょう。犬を連れて行く場合はリードを付けて、ヒグマを刺激しないように注意しましょう。
 - 周辺の音や気配にも気を配りましょう。見通しが悪い所や河川の近く、強風時はクマからもこちらが認識しづらいので要注意。
 - 早朝や夕暮れ、夜間はクマの活動が発見ですので、行動を避けましょう。
 - 新しい足跡やフン、食痕、シカの死体などがあれば近くにヒグマがいる可能性があります。
 - ゴミはクマを引き寄せ、後から来た人を危険におよぼします。捨てずに持ち帰りましょう。

海の近くで注意すること

- 水産廃棄物や、干し魚、生ゴミはヒグマを誘引する可能性があります。一度餌付いたヒグマは繰り返し出沒するようになります。
- 魚のアラ、釣った魚を海岸に捨てないようにしましょう。
 - 干し魚は夜間家の中へ入れる。二階のベランダなどクマの届かない所へ干す、などの工夫をしましょう。
 - 捨てられたジュースの空き缶から、クマが味を覚えることがあります。パーベキューやキャンプの際は後始末をしっかりしましょう。
 - 夜間、漁船の船の中にエサなどを置かないようにしましょう。



計画では「侵入抑制策」と名付け、具体的には電気柵の貸出事業、地域の方々と共同で侵入経路となる河畔林の下草刈りを実施するなどして、ヒグマが市街地に出発しないように活動しています。それと並行して出前講座の開催、昨年から札幌市定山溪自然の村にクマの痕跡を見に行く『ヒグマ痕跡探しバスツアー』をスタートさせ、人とヒグマが共存していることを学ぶ活動などの市民啓発活動を行っています。その中でも南区の小学校が中心となりますが、ヒグマ講座に力を入れています（写真1）。講義と一緒にヒグマの体長や足跡のイラスト・写真が掲載されているクリア

写真1



提供：札幌市環境局

資料2

じこき ヒグマとの事故を避けるために

「ヒグマと出合わないようにすること!」 「もしヒグマに出会ってしまったら...」

野山に入るときは、目をしながら歩きましょう。

ひとりで行かないようにしましょう。

ヒグマのフンや足あとなどを嗅ぎながら移動しましょう。

大声を出したり、走って逃げたり、石を投げたりは、絶対にしないでください。

落ち着きましょう。多くの場合は、ヒグマが先に立ち去ります。

ヒグマの移動する方向を見定めながら、静かに立ち去りましょう。

背中を向けて走ってははいけません。平面的にヒグマが追いかけてきます。

子グマを見つけたら、近くに母グマがいるので、近づかず、すぐに立ち去りましょう。

食べ物のゴミは、野山に捨てたり埋めたりしないで必ず持ち帰りましょう。

生ゴミを野外に設置したり、周囲にゴミステーションへ、ゴミを出したりしないようにしましょう。ヒグマが、ゴミや農作物などの味を一嘗えたと、それを目的にくり返して出るようになります。

札幌市環境局 札幌市環境都市推進部

ヒグマ講座資料

ヒグマのこと知っていますか?

ヒグマの体長

・オス:おとなで 2 mくらい
・メス:おとなで 1.5mくらい

ヒグマの足あと

足の大きさは前足のこぶを測ります

ヒグマが歩いたあと

右前足の足あと 左後足の足あと

ヒグマのフン

草の食料を食べた時のフン

オニグルミを食べた時のフン

ヒグマは食べ物をあまり上手に消化できません。そのため、消化しにくいものは、ほとんどそのままの形で出てきます。

提供：札幌市環境局

ファイナルと「子ども版さつぼろヒグマ基本計画」を配布し、教育の一環としてヒグマの生態を学んでいく機会を設けています(資料2、3)。大人向けには、ヒグマの生態との事故を避ける方法などを記載したリーフレット(資料4)、札幌市内で確認できる色々な動物の痕跡を写真集形式にした「さつぼろフィールドサインハンドブック」を作成し、配布しています(資料5)。こうした資料を活用して、ヒグマが怖い存在ではなく、どういう時にヒグマが怖いのか。出会わないようにするためにどう対処すべきかを学ぶ機会を作っています。

前述のような対策、活動としても、昨年の藤野・簾舞地区のような市街地にヒグマが出発することもありますが、その場合はさつぼろヒグマ基本計画では駆除を含め、毅然とした対応をすると定めています。と



提供：札幌市環境局



ヒグマの生態

生息している場所

ヒグマは北海道内の森林に生息しています。札幌市内では、山間部はもちろん、市街地に近い藻岩山や円山に出没することもあります。

ヒグマの一生

メスは冬眠期間中に2〜3頭出産し、子グマは1歳半〜2歳で母グマから独立します。5〜7月ごろ、繁殖期となり、オスはメスを求めて移動します。オスは単独行動をします。

ヒグマのからだ

体重 オス 150〜400kg メス 100〜200kg <small>(冬眠前後で体重が変動します)</small>	体長 オス 約2.0m メス 約1.5m	嗅覚・聴覚 嗅覚と聴覚が発達しています
---	-----------------------------------	-------------------------------

前足
5本指で長いツメを持っています。ツメは食べ物を握るために穴を掘ったり、石を動かしたりと、日常生活のあらゆることに役立ちます

ヒグマの食べもの

ヒグマは雑食性です。大きな体を維持するために、春から秋にかけて、その時に最も手に入りやすい食べ物を大量に食べます。

フキ 春はフキやセリ科などの植物を食べます	オオハナウド 夏も秋果などの植物のほかアリの巣も食べます	サルナシ は、オニグルミ(栗)は秋はクルミやドングリをたくさん食べます
---------------------------------	--	--

ヒグマの痕跡

ヒグマのフン

ヒグマは食べ物を上手に消化できません。そのため、ヒグマのフンは食べたものが、ほとんどそのままの臭いと形で出てくるのが特徴です。

オニグルミを食べた熊のフン	サルナシを食べた熊のフン
アリの巣を食べた熊のフン	草の食料を食べた熊のフン

足あとの見分け方

ヒグマの足あとには5本の指がわかります。多くの場合、前足の足あとには爪の跡も残ります。前足の幅の大きさによって、おとなのオス、あるいは子グマかどうかを区別できることがあります。札幌近郊では8cm(子グマ)〜19cm(オス)が確認されています。

右前足の跡と この爪を認めます	ヒグマが歩いたあと
左後足の跡と	

Brown Bears in your neighbors: Do you know about them?

札幌市内の山や森にもヒグマが生息しています。ヒグマはときに危険な存在となりますがヒグマのことをよく知ることで事故を防ぐことができます。

ヒグマのフンを知っていますか??

自動撮影装置で記録されたヒグマ写真
撮影地区：豊滝市民の森 / 撮影日時：2010年9月24日 14時27分

提供：札幌市環境局

ところが、昨年の騒動は全道だけではなく全国にも報道されたことで、札幌市民だけではなく道内外から「ヒグマを殺してはダメだ」「北海道に住んでいるのだからそれくらい我慢しろ」「共存のために殺さない方法もあったのでは」など、様々なご批判・ご意見をいただきました。そうした声がかきつけとなつて、ヒグマを殺処分することの是非を含めた道徳的な視野を入れることもできると気づきました。

今年からは中学生、高校生向けにもヒグマ講座を開催し、ヒグマとの共存を考えてもらう取り組みを始めています。まだ効果は実感できていませんが、ヒグマ講座を通して、幅広い市民の方々に「ヒグマという動物を知ってもらい、人との間にどういふ問題があつて、それを解決するためにはどういふことが必要なのか」まで踏み込むことで、市民の意識が高まるきっかけになればと考えています。

押谷 札幌市もクマ騒動がきっかけになつて、新しい取り組みが始まつたということですが、島牧村のような議会との軋轢はなかつたのでしょうか。

坂田 札幌市ではそのようなことはありませんでしたが、こちらの動きに厳しく指摘する傾向があります。札幌市としては、先ほど話をしたさっぽろヒグマ基本計画に沿つて肅々と対応を進めていたのですが、ヒグマ騒動後に開催された議会では、ほぼ全ての会派から質問を受けました。

押谷 住民の安全を考えると、議員としてもヒ

グマ問題は質問しやすかつたのかもしれないね。皆さんからの話を聞いて、ヒグマとの共存のためには、まず出沒理由を取り除くことが必要だと分かりました。その第一歩として、佐藤先生は川沿いの草刈りを始め、小川さんは放棄された果樹園の木を伐採し、ヒグマの市街地侵入対策に携わつておられますが、始めた経緯などをお話いただけますでしょうか。

ヒグマの連続出沒がきっかけになつて

佐藤 二〇一一年から三年連続で市街地の内部までヒグマが出沒する事例が発生しました。二〇一三年には豊平川の河畔林を通過したと思われるヒグマが南区にある藻南公園まで行き、最終的には駆除されました。これがきっかけとなつて、私が事務局長をしているNGO浦幌ヒグマ調査会が中心となり、地元石山地区の方々、札幌市の協力を得て、豊平川河畔林の草刈りを始めました。

昨年の藤野・簾舞地区のヒグマ騒動でも、市民からは「入つてきたクマは悪くない」「放つておけば山に帰る」という声がありました。一方で、ヒグマが出沒した地域に暮らす住民にとっては、家の近くに出沒し、散歩中の住民がヒグマを目撃している状況ですので、「地域の安全を守らなければならぬ」「不安材料は排除しなければならぬ」など様々な意見がありました。

しかしながら、市街地にヒグマが侵入してしまつた段階で取れる手段はほとんどありません。確か

にしばらくすれば山に帰るかもしれませんが、それを見守ることができるといふ問題も発生しますし、結局は何か事故があつたらどうするといふ話になつてしまいます。だからこそ、ヒグマが出てきたときに議論をするのではなく、出る前の議論が重要となります。そこで、札幌市には「ヒグマが侵入した経路が分かっているなら、二度とそこから侵入されないようにその原因を遮断しましょう」と提案しました。

ただ、行政としてそのような活動ができるのか分かりませんでしたし、仮にできたとしても予算が必要で、活動の実現には越えなければならぬ壁がいくつありましたので、市民団体が自主的・試験的に進めるかたちで二〇一四年から河畔林の草刈りをスタートさせました(写真2)。

草刈り活動が住民・地域を繋ぐきっかけに

佐藤 活動開始前は、地元町内会を始めとする地域住民との連携はありませんでした。札幌市とは草刈り活動の実施に向けた協議を続けていたこともあり、まちづくりセンター経由で石山地区の町内会関係者を紹介してもらつたことになりました。事情を説明し、町内会の協力も得て活動を始めることができました。

最初は私も張り切つて活動していたのですが、前例ができてしまえば、あとは何となく動いていくことに気づきました。その理由は、これまでの自分たちのためにしていた自宅周辺や町内会で

写真2



提供：浦幌ヒグマ調査会

やっていた草刈りを公共性の高い河川敷でやってみようという簡単な話だったからです。さらに、今まで草だらけで歩きたくない場所だったが、きれいになったので歩いてみたくなったとか、ゴミのポイ捨ても減るなど、地域美化、防犯などヒグマ対策だけに限らない様々なメリットも出てきま

した。
もちろん、どうやって活動を継続させるかといった課題はあります。そのためには最初は頑張っても、あとはあまり頑張りすぎない。ヒグマ侵入防止のためという義務感を出さずに楽しく持続的に活動することが重要だと考えています。

最近では、ボランティアの若い大学生と地域の高齢者が年に一回集まって草刈りをする事自体が楽しいイベントになっています。草刈り終了後にヒグマの生態や対処法を学ぶレクチャーを行ったり、ピング大会をしたり、みんなでお茶を飲みながらよもやま話をしたりと、草刈りがきっかけで地域を繋ぐ場に変化してきています。

押谷 佐藤先生がきっかけを作り、その後は地域住民が中心となつて、自主的に活動されているのですね。小川さんの活動に対しては、行政の支援はあるのでしょうか。また、住民の反応はどのようなのでしょうか。

住民意識の高まりを生かす

小川 藤野・簾舞地区でのヒグマ騒動後、草刈り活動を考えている地域住民がいるという話を聞き、私たちも何か手伝えなだろうかと考えていました。面識のあるNPO法人エンヴィジョン環境保全事務所に話を持ちかけたところ、放棄果樹を狙ってヒグマが市街地に出没していると説明を受け、草刈りではなく果樹伐採を打診されました。また、この法人は札幌市の委託で「ヒグマ及びエゾシカ市街地出没対応業務」を行っていたこともあり、札幌市の担当者を紹介してもらい、果樹伐採に取り組むことにしました。

しかしながら、私が主宰するエコ・ネットワークではどうやって伐採を手伝ってくれる人を集めるかが課題となりました。そこで新聞などのマス

コミにお願いし、果樹伐採のボランティアを募集したところ、三〇人ほど集まりました。実際には伐採日時に都合のつかない人もおりましたが、一五名〜二〇名程度に来ていただきましたが、集まったボランティアの半数が刈り払い機やチェーンソー持参の参加者もいました。

今回、伐採対象となったのは六〇本のサクランボの木です。札幌市、NPO法人エンヴィジョン環境保全事務所、エコ・ネットワークでの事前会議では、すべて伐採するにはどのくらい時間が必要なのが見当もつきませんでした。実際は三回で済みました(写真3)。

また、倒した木は輪切りにして、枝も片付けなければならぬのですが、最初は伐採した木を一年くらいその場に放置させてもらうことも覚悟していました。ですが、薪などに使いたいという人がおり、予想より早く片付けることができました。サクランボ以外にも実が大きくなるナシやリンゴの木を伐採する予定となっていますが、最近では熱心な参加者から「次はどこで伐採ですか」と催促がくるほどです。

押谷 住民の活動が行政の活動を補完しているということですね。この点について、札幌市はどのように考えておられるのでしょうか。

行政ではなく地域・住民主導の体制構築へ

坂田 草刈りも放棄果樹伐採の取り組みもそうですが、札幌市が率先してやってみようと、住民

写真3



提供：札幌市環境局

としては「ヒグマ対策はすべて市役所がやるもの」となってしまう。札幌市としてはヒグマ問題を行政だけの課題ではなく、住民を含めた自治体全体の課題にしたいと考えています。そういった意味でも今回、市民団体、町内会の方々が主導となって草刈りや果樹伐採をやってくれたのは、とても心強い・頼もしい存在だと思っています。

小川さんの話にあったサクランボの木も札幌市とNPO法人のヒグマ調査で、伐採後の木を薪やチップにするニーズがあるらしいということも分かっていました。今年になって、果樹の持ち主と

連絡が取れ、上手く話がまとまり伐採にこぎ着けたのですが、放棄された果樹園がたくさんあるのも事実です。つい先日も新たな放棄果樹が見つかってしまいましたので、また小川さんにはお話ししなければなりません。

押谷 札幌市にはそのような問題のある場所が一方所ではなく、多数あるのですね。放棄果樹園の問題はこれは後継者不足、高齢化と言った今の社会問題にも繋がってきます。この点について幾島さんはどうお考えでしょうか。

対策は進んだものの

幾島 島牧村で言えば、この二年間でヒグマが出る前の対策が大きく進みました。人口減少で山と住宅地がすごく近い状態になっていますが、その間に電気柵を二キロメートルに渡って設置しました。この効果が現れていて、国道に出てくるヒグマはかなり減り、人の食べ物に餌付いているヒグマも今のところ確認されていない成果も出ています。

しかし、島牧村が主導して電気柵の設置をしたことは札幌市との大きな違いです。また、今後の課題として電気柵の外側にゴミを置かないようにするのはもちろんですが、置いているのを発見した場合は住民自身が回収する、自宅敷地裏に設置されている電気柵の電圧チェックは自分で実施するといった小さなところから住民を巻き込んでいければいいのではないかと感じています。

小川 エコ・ネットワークが札幌市内で関わっているプロジェクトでも、ヒグマ対策として電気柵を設置しているのですが、意外と管理が大変です。草が伸びてくると、草がアース線の役割を失ってしまい、電圧が下がってしまうのです。島牧村では電気柵の草刈りはどうしているのでしょうか。

幾島 島牧村が契約している草刈り業者がいて、村役場の人も見回りのついでに草を抜いたりしています。また、先ほど話をした活動を始めた住民が自分で見て回って草を抜いたり、周りの住民に声をかけたりしています。

押谷 そういう意味でも、住民が自主的にヒグマ対策に関わることが大切だということですね。

昨年、私の勤務する酪農学園大学の構内にもヒグマが入ってきて騒動になりましたが、こうした予期せぬことがこれからも増えてくるのではと考えています。市街地に入ってきてしまったヒグマはどう対応するのがよいのでしょうか。

3 出没したヒグマとの向き合い方を考える

なぜ、市街地に出没するのか

佐藤 市街地に入ってきてしまう原因には、季節や出てくるヒグマの年齢、性別によって異なるので、対応の方法も変わります。同じ市街地に入ってきてしまった場合でも、目撃されているだけで人を見たら避けているような状況と、例えば農作物や、人が出すゴミに強く執着してしまっているという良くない状況とでは対応が変わります。「北海道のヒグマ管理計画」、札幌市の「さつぽろヒグマ基本計画」でも、ヒグマの「行動段階」によって対応方針を変えるようにと定めています。さらに、人由来のエサに付いて離れない場合は「問題個体」と捉え、駆除が優先されることとなります。この時には、銃所持の許可を持ちヒグマを駆除できる技術を持った人が必要になります。市町村は鳥獣被害防止特措法に基づき、被害防止計画を立てていますので、そうした技術者を臨時職員や

嘱託職員として鳥獣被害対策実施隊・ヒグマ防除隊など様々な名称で委嘱し、出没時に見回りをしたり、罠を設置したり、駆除を実行したりします。このように、市町村は常に問題個体への緊急対策が取れるように平時から備えておくしておくことが必要と考えています。

小川 私はヒグマが単なる通過、移動の途中だったのと、問題個体として地域に居着いたのでは状況が違っていると感じています。そう考えると、島牧村のような例はむしろ少なく、冬眠期間を除いた一〇カ月ほどの活動期間のうち、半日か一日程度、地域を通過しただけなのに、住民は「ヒグマが出た」「恐怖を感じる」と大騒ぎしている気がしてなりません。

ヒグマの行動形態・行動目的が出没に影響

佐藤 そもそも、ヒグマは特に春先から初夏にかけて出没・目撃情報が非常に多くなります。ヒグマの生態的にいうと、この時期はちょうど子グマが親から離れて独立し、「分散」と呼ばれる新しい生息地へ向かうころにあたります。ところが、個体によって好奇心が旺盛だったり、注意力が散漫だったり、あるいは親の言うことを聞かないタイプだったりして、子グマが人の多いところに出てきてしまうケースが散見されます。昨年、私が勤務する酪農学園大学に来たヒグマも二〜三歳くらいの雄グマで、親元を離れたばかりの個体でした。



いくしま なお 氏

また、繁殖期になると雄グマは雌グマを求め、広い範囲を動き回りますが、雄グマは人の多いところにはあまり来ません。一方で、子グマを運んだ母グマが雄グマを避けるため、市街地に出没してしまうこともあります。そうしたヒグマは人の近くに来て、そこに執着するわけではないので、小川さんがおっしゃるように、通過しただけ、あるいは時間が経てば生息地に戻るわけです。住民も出沒・目撃となった原因を理解し、受け止めることができれば、少し冷静に対処できるのではないかと思います。

けれども、そうした対処を許容できない地域や人もいますので、それに対し市町村はどのように説明するのか。それが重要です。住民からすぐに行動を求められた際、市町村として「パトロールはするが、少し様子を見ましよう」と判断することができるのか。ただ、野幌森林公園のような場所だとヒグマも戻るのが難しい場所にまで入り込んでしまっているので、判断が難しくなるか



さとう よしかず 氏

もしれません。

押谷 住民からすればヒグマは怖い動物なのでしようが、知床ではヒグマと遭遇してエサを与えてしまう観光客もいると聞いています。例えば、クマがいるアメリカの国立公園ではどのような対応をしているのでしょうか。

アメリカ国立公園の場合

佐藤 アメリカにあるすべての国立公園を把握しているわけではありませんが、来訪したビジターへのレクチャーはもちろん、ビジターセンターにある資料や展示物もどういう場合にどういう状況になりうるのかなど、具体的に生息、行動をきちんと正しく伝えるような努力がなされておられ、普及啓発にかける努力量はすごく高いです。当然、学校教育も実施しています。

ところが、国立公園の周辺を見ると、同じ地域にある観光地や農業者からは常に駆除の要求が起

きるなど様々な軋轢が発生しています。つまり、アメリカの国立公園の中でもすべてが上手くいっているわけではなく、海外でも苦勞していると言えるのかもしれない。

小川 アラスカ州デナリ国立公園を訪問すると、ビジターセンターでビデオを見せられます。時間と言えば一〇数分のもですが、とても分かりやすくできています。見終わると「あなたはクマに対する理解を深めました」と書いてあるバッジをもらえます。冒頭の挨拶で理事長の佐藤先生が「ベアカントリー（クマの森・クマの土地）」の話をしていましたね。デナリ国立公園も同じで、クマが主役であることをしっかり伝えていきます。

日本でそこまで徹底しているところはないでしょう。最近、ヒグマが北海道の象徴と呼ばれるようになってきましたので、北海道に向かう飛行機の中で、ヒグマのレクチャー映像を流すべきだと鈴木直道知事に言いたいですね。

押谷 そう考えると、北海道にはヒグマがいることを前提として対策をしなければなりませんね。先ほど、島牧村ではクマの知識を持つ住民が村や住民の意識を変えつつあるとの話がありました。これについてどう評価したらいいのでしょうか。

小さな自治体だからその可能性

幾島 島牧村のすごいところは、五年前に嫁いできた住民が「知床に視察に行った方がいい」と発言した際、副村長が「一緒に行きましょう」と

言えるところでは。こうした距離感には村ならではの
だと思えます。その住民に対し村長も「何かいい
アドバイスがあれば教えて」と気軽に言えますし、
村長と猟友会も常日頃から顔を合わせていて「もつ
とこうしたらいい」と議論をしている。小さな村だ
からこそ生まれるしがらみもあるのですが、お互い
が協力できれば課題を直ぐに飛び越えられる土壌が
あります。取材を通じ、ヒグマ対策の先進地になっ
ていく可能性がすくあると感じています。

押谷 同様にヒグマが出没する札幌市は二〇〇
万人近い人口を有し、島牧村とは対極にある自治
体です。冒頭で教育を始め啓発活動に力を入れて
いるとの話がありましたが、今抱えている課題に
対しては、どう向かっていけばよいのでしょうか。

マスコミ・映像の影響力を生かす

坂田 昨年の藤野・簾舞地区におけるヒグマ騒
動を振り返ると、まだまだ住民ひとり一人までヒ



おがわ いわお 氏

グマに対する意識が浸透しているとまでは言えな
かったと感じています。札幌市としては出前講座
の実施、ヒグマを寄せ付けないために家庭菜園を
囲む電気柵を設置しようというPRし、電気柵の
貸出事業も行っていましたので、対策は最大限実
施していると思っていました。

ただ、実際はヒグマが徘徊するようになってか
ら、住民が電気柵貸出事業に気づいてくれて、よ
うやく借り手がついたという状況です。もし、住
民に対し早い段階で電気柵の重要性を周知し、皆
さんの理解も深まれば、昨年のようなことは発生
しなかったのかもしれない。また、電気柵以外
にも草刈りや果樹伐採をする場所もたくさんある
ので、どうすれば住民に理解してもらえるのかも
考えていく必要もあります。

**藤野・簾舞地区のヒグマ騒動直後、西区小別沢
地区で家庭菜園を狙ったヒグマの出没が相次ぎま
した。その時、電気柵に触れて驚いて立ち上がり
て逃げた子グマの映像が監視カメラで捉えられ、**



さかた かずと 氏

ニュース映像として報道されました。マスコミが
すくインパクトのある映像を流したこともあ
り、今年、小別沢地区の家庭菜園では電気柵の普
及が進んでいます。マスコミにはこうした映像を
たくさん流してもらえれば、ヒグマの市街地侵入
抑制の一助になるのではと考えています。

押谷 さきほど、小川さんからも映像で見るこ
との重要性を話していただきましたが、マスコミ
が流す映像の力は大きいと思います。そもそも、
都心部と農村地域ではヒグマ問題に対する意識な
どの違いがあるのでしょうか。

4 課題の解決に向けて

駆除ありきの考え方を改める

佐藤 まず、北海道におけるヒグマ問題のほと
んどは農村地域で発生していたと言っても過言で
はありません。冒頭でも少しだけ話しましたが、



おしたに はじめ 氏

一九九〇年の春クマ駆除廃止以降、徐々に個体数を増加させて、全体的に見ると北海道のヒグマは増えてきています。二〇〇〇年代以降になると、かつてヒグマが減少し、絶滅の恐れのある地域個体群に指定されている個体が回復したことで、札幌市のような都市でも出没するようになりました。

ところが、前述のように春グマ駆除で数が減少したと言われていたころも、農村地域ではずっとヒグマが出没して農作物を荒し、駆除されてきました。こうした地域では春グマ駆除の廃止以降、三〇年間に渡ってヒグマが出る↓通報し猟友会が出勤↓駆除の流れができてしまっています。結果として、駆除数が増えても農作物被害は減らない。それがわかっていても、その場の満足感や達成感のために目の前で悪化するヒグマを駆除するという対症療法での対応が定石となってしまうという現状があります。ただ、これでは課題解決に繋がりません。やはり、札幌市の取り組みのように「なぜ出てくるのか」という原因を探って、平時から未然防除の対策をしない限り、当然ヒグマは出没してきます。ですが、農村地域で説明しても「それは分かっている」「そうかもしれない」とは言ってくれても、結局は猟友会に連絡し、駆除するスタイルは変わりません。

住民感情に配慮した対策を

佐藤 一方、札幌市の場合は何十年という長い間ヒグマ問題がほとんど発生してこなかった地域ですが、生息数の回復によって出没するようにな

りました。しかも、出没するエリアは農地や果樹園だったところが住宅地に置き換わり、新たに引越してきた住民のところにヒグマが出没しています。そうした住民はヒグマとの付き合う経験もないため、どうしたらいいか分かりません。

さらに言えば、札幌市のような大都市にもかかわらず豊かな自然に囲まれていることを好んで暮らしている住民もいます。その中にもヒグマ出没は不安だけど、駆除は素直に認められないと思っ

ている住民もいれば、離れて静観している住民もいるなど、札幌市にはいろいろな価値観を持つ人が暮らしています。その中で札幌市として、先ほどの坂田さんの話ではありませんが、地域住民の安心安全を最優先に駆除の選択をすれば、もの凄

い数の反対意見が出てきます。
坂田 意見は駆除だけに限りません。土地所有者から果樹や河畔林の伐採許可を得て作業を進めても、周辺の住民から「ここには動物がいたのに」とか「鳥がいたのに」と言われてしまうこともよくあります。

佐藤 これは札幌という地域特有の問題だと感じています。西日本で鳥獣害対策に携わっている人たちに「ヒグマが出るので河畔林を伐採したら、ここは鳥が繁殖していたとクレームが来た」との話すると驚かれます。にわかには信じられないかもしれませんが、本当にある話です。私も草刈り活動を始めた際には、ヒグマのためだけにやると批判的な声があるだろうことも踏まえ、「生物多様性保全とクマ対策」とタイトルを掲げてやって

きました。そういう多様な価値を持つ人たちが住むことを踏まえると、バランスを考えた選択をしなければなりません。

だからこそ、札幌市はヒグマの生態や出没する原因を住民に説明し、知ってもらうことで未然防除の重要性を理解してもらおう政策にシフトしたのだと思います。しかしながら、農村部の場合、農作物被害は減らないものの、致命的な問題となっているわけではありませんし、人身事故が多発しているわけでもない。時間や労力のかかる未然防除を自分たちが行うよりも、今まで通り行政任せの駆除を依頼するという方法で満足している実態があるのだと思います。こうした壁を突破するのは相当むずかしいのかもしれませんが。

押谷 都市部と農村地域ではそうした意識の違いがあるのですね。ただ、過去にはヒグマによる大きな事件・事故がありましたし、最近でも住民がヒグマに襲われる事件・事故が発生しています。私たちはヒグマによる被害を自然災害として捉えるべきなのか。あるいは人間の行動によって引き起こされている人災として捉えるべきなのか。どちらが正しいのでしょうか。

住民がヒグマの存在を意識する

小川 これは感覚的な問題にもなるのですが、アイヌ時代を別として明治以降の開拓、その後の開発は、ヒグマの領域を一方的に冒す活動だったと言えるのではないのでしょうか。つまり、ヒグマ

はずつと被害者だったわけです。札幌でも一八七八年（明治一年）にヒグマが住民を襲う札幌五珠事件が発生しています。そうしたヒグマに関する事件・事故を見ていくと、ヒグマの反逆なのかもしれないと思ったりもします。

ヒグマ、住民共に被害者としての意識を持つのであれば、どのようにバランスをとるのかを考えなければなりません。しかし、住民の中にそういう原罪意識はない。結局のところ、札幌市で始めているような住民を対象としたレクチャー・講習会などを道内全ての市町村で実施し、どこかの機会に住民にヒグマのことを理解してもらおう活動しない限り、住民が持っている恐怖感を取り除けないと私は考えています。

時には発想の転換も

佐藤 アメリカのカリフォルニア州は三〇〇〇万人以上が居住していますが、野生のピューマも生息しています。そのピューマには発信器がついていて、場所が把握できているのですが、Twitterアカウントを持っていて、誰かが居場所とともにつぶやいています。フォローすればピューマの動きが見える面白い取り組みをしています。技術進化を活用すれば単に日時、場所だけではなく、いろいろな情報発信ができるのかもしれない。

坂田 現在、ヒグマが市街地の近くに来ている、あるいは市街地にはみ出していると分かったとき、札幌市としてできる対策がないというジレン

マがあります。それも考えなければなりません。NPO法人ピッキオが長野県軽井沢で進めているような共生スタイルとなるのがいいのでしょうか、なかなか難しい。

佐藤 ペアドックを使ってクマを追い払う活動ですね（編集部注・ペアドックとは、クマの匂いや気配を察知するための特別な訓練を受けた犬。スタッフの指示に従い、大きな声で吠えさせて、クマを森の奥に追い払う）。

小川 ペアドックはシカにも使えると聞いていますので、兼用できないでしょうか。

坂田 去年、滝野すずらん丘陵公園に前述のピッキオで飼育しているペアドック「タマ」ちゃんが来たので見せてもらいましたが、キツネやシカなどいろんな動物に反応すると言っていました。その中でもクマには特別な反応を教えているとのことでした。

小川 名前が挙がった滝野すずらん公園は最近もヒグマがしばしば侵入していますが、アメリカの国立公園のように、最初に注意事項のレクチャーを受けた上で、ヒグマが出るかもしれない国営公園として売り出したらどうだろうか。ヒグマとの共存がアピールできるいいきっかけになると思う。

押谷 確かに、ヒグマに発信器を取付し行動が把握できれば、市街地侵入も避けられる。侵入しても正しい情報が提供できるかもしれませんね。

一方、島牧村では電気柵設置で、市街地侵入は減ったという話がありました。それ以上に一人の住民の行動によって大分意識が変わってきたのではな

いかと感じているのですが、現在、住民はヒグマに對しどのような意識を持っているのでしょうか。

ヒグマ対策は自治体全域の課題

幾島 島牧村は五〇年ほど前にクマに襲われ住民が亡くなった事実があり、「ヒグマは一頭もいなくていい」と発言する住民もいます。共存のために活動している住民も、絶対にヒグマを殺してはいけないと考えているわけではなく、人身事故があったときの例外もあります。他方で、ヒグマを殺したくないが、自分たちの安全は守りたい人もいますし、ヒグマが離れたところにいるなら別にいいのではないかと考える人もいます。

ただ、ほとんどの全ての住民に共通しているのは島牧村の自然が好きだから住んでいて、島牧の豊かな自然の中で暮らしていくことに誇りを持っているということだと思います。こうした共通意識があるからこそ、島牧村のヒグマ対策は住民みんなで作るものだ、ということを手く伝えることができれば、先ほどと重複しますが、ヒグマ対策の先進的な地域になれると考えています。

押谷 ちなみに、島牧村で漁業を営まれている住民はヒグマ対策に消極的なのでしょうか。

幾島 漁業を営んでいる住民が捨てていた物にヒグマが餌付いてしまったので、関係はあるのですが、最初はヒグマへの距離感があったと感じています。

坂田 漁業関係者のヒグマに対する理解が進ん

だのでしょうか。

幾島 二年前よりは理解が進んだと感じています。元々、島牧村は今まで猟友会の育成に力を入れてくるなど、先駆的な取り組みをしてきました。こうした村の政策と猟友会の努力に住民の活動が加わることで、影響を受ける若者住民や役場の雰囲気も変わりつつあります。全ての住民に「ヒグマ問題は自分たちが全員でかかわる」という想いが広がれば、これからもっと変わっていくのではないかと思います。

押谷 そう考えると、自然が豊富でヒグマも生息する札幌市は、メリット・デメリットの両面を持つ自治体だと感じてしまいます。そうした視点で考えると今後、どのような対策が必要になるのでしょうか。

坂田 人口も多く、面積も広いのが札幌市の特徴です。したがって、ヒグマに対して慣れている地域と、そうではない地域があります。また、ものすごく意識の高い住民が住むところもあれば、そうでないところもあり様々な状況です。このような考え方や意識のズレを平準化していくにはどうするべきかを考えている合間に、今まであまり出していない地域にヒグマが出てきます。

結局、行政側の対応・体制が後手後手となってしまう状況です。ヒグマが出没する地域に周知することも重要ですが、ヒグマの会が二〇一九年に開催した『ヒグマの会40周年記念 ヒグマックス2019くまづくしの1日』のような、札幌市の住民全員を対象として、ヒグマについて考える

イベントを開催することも必要だと感じています。

押谷 そうなると、ヒグマ対策は除雪やゴミ処理と同じように社会資本の一環として考えていく必要があると考えているのですが、皆さんは今後、そうした視点での対策が必要になるとお考えでしょうか。

ウイズベアーズのすすめ

佐藤 出没したヒグマは駆除すればいいと思っ
ている地域は多いのですが、何度も言うように、
まずはヒグマの存在を正しく知っていただきたい
い。その上で恐れるところは恐れつつ、付き合う
ところは付き合い、上手く共存する方法を探して
いくべきと考えています。

世の中はウイズコロナの時代になってきていま
すが、北海道民としては「ウイズベアーズ」の取
り組みを常識にしていけることが重要になってくる
と思います。自分たちの身の回りにいるヒグマと
どう向き合っていくかを考えると、駆除すべき、
あるいは共存すべきという議論になりがちです。
しかしながら、ヒグマを完全に排除することは
できませんし、市街地のあちこちヒグマがいるこ
とを受け入れなさいと言っているのでもありませ
ん。その中間的なところを考えれば、地域毎に分
けて考える「ゾーニング」が有効ではないでしょ
うか。事実、環境省の特定鳥獣保護・管理計画作
成のためのガイドラインにも、北海道のヒグマ管
理計画と札幌市のさつぽろヒグマ基本計画にも

ゾーニングが記載されています。
そして、幾島さんの話にもありましたが、森の
中にヒグマがいる状況は生息地ですから問題あり
ません。ただ、農地、市街地は人が暮らしている
地域であり、人が安心して暮らせるまちづくりは、
自治体として成し遂げなければならぬ責務でも
ある。両者が気持ちよく生活できるための手段と
して、市街地にヒグマがはみ出してこないような
防衛ラインをつくる必要が出てきます。とは言え、
ヒグマと人が話し合って防衛ラインを決めること
はできませんから、人からヒグマに教える必要が
でてきます。そのためには人が草を刈って緩衝帯
を作り、ヒグマを誘引する原因を排除する。そう
した最低限の住み分けした上で、防衛ラインを超
えてきてしまったのは、悪いヒグマか、あるいは
人間が手抜きをしたから入ったということです。

新型コロナウイルス対策でも住民自らが手を
洗ったり、マスクをしたりして対策を講じていま
すが、万が一の時には自治体や医師のお世話にな
らざるを得ません。ヒグマ対策も同様に、まずは
自分たちでできる対策をとる。その上で、ヒグマ
が市街地に出てきた時には自治体が猟友会やヒグ
マ防除隊に出動依頼し、入ってきてしまったヒグ
マには毅然と対応し、駆除も選択肢にする。そう
した準備や体制を整えてからヒグマがいていい、
いいはいけないという話をすべきです。
さらに、新型コロナウイルス対策では自治体が
正しい情報を発信し、感染経路を追跡しています
が、ヒグマも同様に出没マップでどこに出没して

いて、個体の特徴、どのルートを通ったかを自治体として常に発信していく必要があります。そうした情報公開をしつつ、個体数調査も実施し、その結果も発信することが自治体としてやるべき最低限のことだと考えています。

前述の体制が可能になれば、上手にヒグマと付き合っていく「ウイズベアーズ」として、これからの北海道における新生活様式になるのではないのでしょうか。もう少し掘り下げれば、猟友会など万が一の時に対応できる人たちの減少や高齢化が問題になってきています。そうした人たちの存在も正しく理解し支えながら、念のための体制維持についても考えることが重要だと感じています。

外から住民を動かすきっかけを作る

小川 環境ボランティアの視点で言えば、私たちはヒグマ対策だけではなく、様々な野生動物の環境ボランティアに携わってきました。その一例を紹介しましょう。えりも町でシカの角を拾うボランティアをしました。牛の飼料として与える採草地にシカが入り、角を落とすといくとシカの角でトラクターのタイヤをパンクさせてしまいます。

こうした事例が年数回も発生し、困っているという話を聞き、地元の詳細を得て、みんなで拾うことにしました。毎回、二〇〇〜三〇〇程度のボランティアを募集しまして、多い時には一〇〇人ほどの応募があります。一回の回収で一五〇本くらいの角を回収することもあり、拾った角は参加者

に持ち帰ってもらいます。

地方だから人が動かないと嘆いているケースをよく見聞しますが、シカの角拾いのように、都市部から人を連れていくことで地元の人を巻き込む、あるいは動かすきっかけにすることもできる。

最近、旅行会社を経営する息子らが環境ボランティアを旅行のメインイベントにする取り組みを始めるようとしています。確かに、災害が起これば多数のボランティアが集まるわけですから、そうした人たちを組織化し、ヒグマ対策にかかわってもらうのも一つの手段かもしれません。

新しい住民参加のかたち「クマ活」のススメ

佐藤 紹介になりますが、今年から斜里町ウトロ地区にあるホテル従業員が中心となって「クマ活」という活動を始めました。元々、ヒグマが市街地に侵入する問題はありませんが、地域としては研究チームや専門家も多数在籍する知床財団にとりあえず任せおけばいいという雰囲気があったのではないかと思います。しかし、それでは地域の重要な資源であるヒグマが電気柵を超えて地域に入り、問題を起し観光客が危険に晒される可能性はいつまでも解決しません。そうした問題意識から、侵入経路となりそうな藪をメンバーが草刈りをするにしました。

新型コロナウイルスの関係で実現はしていませんが、今後は宿泊した観光客にもこうした活動に参加

してもらおう予定と聞いています。私はこの取り組みをヒグマ問題に対する新しい住民参加のかたちと捉えています。観光業者が地域を守る活動をするこ

とで、少しずつですが、別な観光業者や旅行者、地域住民などがかわらうとの流れになっています。ウトロ地区でも以前から「何かしたい」と考えていた人はいたはずですが、そこに島牧村や札幌市、野幌森林公園のヒグマ騒動が報道されたことで「やっぱり何かしなければ」という意識が変わってくる。そうした意識が高まってきたところで、マスクミが先駆的な取り組みや活動事例を上手く報道してもらえれば、ヒグマ対策の活動はもっと広がっていくと思っています。

私の勤務する酪農学園大学は、昨年の騒動対策として野幌森林公園に沿って電気柵を設置し大学構内にヒグマが入れないようにしましたが、同じ野幌森林公園に隣接する札幌啓成高校では今年、ヒグマの侵入経路を予想しマップを作ろうとの動きになっています。「やらなきゃ」と思ったときに応えられる環境を作ること重要ではないでしょうか。

押谷 札幌市のような啓発活動、マスクミによる報道で住民の意識を高めていくのはもちろんですが、道内外に住む人に向けてヒグマ問題が北海道の課題であることを伝えることも重要なかもしれません。

ヒグマ問題は人が引き起こす問題

小川 札幌市の特徴や自慢できる点はやはり、

豊かな自然とヒグマだと思えます。世界中を見渡しても二〇〇万人近い人口を有する都市で雪がこれほど多く、ヒグマがごく普通に生息しているのは札幌市だけでしょう。そう考えると、これだけの人が住んでいて、ヒグマが頻繁に出ているのに事故が起こっていないのは今のところ奇跡かもしれません。だからこそ、この問題をどうすべきか考える中で、やるべきことはいろいろあると思えます。

こんなことを話すと怒られてしまうかもしれませんが、ヒグマは安心安全の動物だと私は思っています。それは昨年の藤野・簾舞地区、一昨年の島牧村でも分かるように、あれだけ人前に姿を現していても人は襲っていない。それがヒグマの基本的な性格だということまず理解してもらう必要があるのではないのでしょうか。

そう考えると、冒頭で話した萱野茂さんの「ヒグマはアイヌのことをよく知っている」との言葉は、非常に重みがあると感じてもらえるはずですが、だからこそ「ヒグマ問題は人が引き起こす問題」であることを強調したい。そうになると、人口二〇〇万人近い札幌市でヒグマを始めとする野生動物に対応する部署の職員が、坂田さんを始め数名で良いのかという問題もあります。

所有者不明の土地が対策を阻む

坂田 まず、市役所の中に「熊対策調整」という名称を持つ部署自体が珍しいと思います。小川

さんのご指摘どおり、配置している職員数は少ないですが、ヒグマ対策に集中できる職員を配置できているので、他自治体よりも先駆的に取り組んでいると感じています。また、佐藤先生を始め、ヒグマの市街地出没対応を委託できるNPO、小川さんのようなボランティアなど周りに協力してくれる人たちがいることも、札幌市のヒグマ対策にはプラスとなっています。

先ほど、猟友会の高齢化、後継者不足の話が出ていましたが、実際のところは札幌市のヒグマ防除隊も高齢化しています。平均年齢では七〇歳くらいですが、これが悪いことだとは思っていません。というのも、島牧村のような兼業でやっている人が少なく、すぐに出勤できる人が二〇人ほど揃っているからです。後継者不足問題も札幌の猟友会は規模が大きいこともあり、次を担う若い方がいる。こうした点も含め札幌市はすごく恵まれている環境にあると考えています。

他方で、どのようにして緩衝地帯を設置するかに苦慮しています。住宅街とヒグマが住んでいる山との境目が全くなく、隣り合わせになっているのが札幌市の特徴です。要は人とヒグマが住んでいる場所が隣り合わせですから、ヒグマが出てきてしまうのは当然といえば当然です。

その対策として緩衝地帯をできる限り広く取り、人里空間を確保したいと考えているのですが、そこには必ず人の問題が関わってきます。例えば、住宅のすぐ隣を緩衝地帯とするために土地所有者を調べてみると複数の人が所有していることが分

かります。そして、土地の上にある木を伐る、果樹を伐採するとなったときには、土地の所有者の了解を得なければならないのですが、所有者にたどり着かないという原野商法の問題が頻発しています。これをどう解決していくかが現在の課題です。

押谷 原野商法によって自然が保たれていると考えることもできませんが、対策を進める上では大きな課題ですね。今後、過疎化、高齢化が進むと、耕作放棄地も増加するでしょうし、ハンターの確保など地方特有の課題は浮かび上がってくると思えます。そう考えると島牧村の騒動は、他の自治体にも一石を投じたように思うのですが、そのあたりはどうお考えでしょうか。

ヒグマ騒動はいつでもどこでも起こりうる問題

幾島 全道規模でヒグマ出没が相次いでいます。が、たまたま島牧村でヒグマ騒動が発生しただけ、と思っけています。島牧村もヒグマの生息は前から分かっていた。だからこそ、若手ハンターの狩猟免許補助や出勤報奨金を高く設定するなど、高齢化・人口減少に対応する政策を打ち出してきました。現在、村には一四人のハンターがいるのですが、半数が三〇〜四〇代で、一方でベテランもいて教えながら育てていく体制ができています。だからこそ二年前、けが人を出さずに毎日パトロールできるよい面もあったのですが、こうし

た事実をマスコミが報じてこなかった。私はその責任を感じています。

そして、私たちが「ヒグマが出没しています」と報道したことで、村を訪れる観光客が減って、経済的な悪影響を与えたのも事実です。けが人を出さない注意喚起のためでしたが、「ヒグマが出た」だけで終えず、その後も騒動後の村の対応や猟友会、住民の活動などを継続して取材して二年が経過しました。島牧村がヒグマ対策に頭を悩ませてきた経過をマスコミとして伝えていくことで、他の自治体は準備や考えるきっかけになればと考えています。

一方で、簾舞・藤野地区のヒグマ出没では、私たちマスコミも現場に押しかけました。その際、ヒグマが逃げる経路を塞ぐ、あるいは人に慣れさせてしまったという問題が起りました。私は取材マナーとして、ヒグマの知識を持って取材に行くべきだと実感しました。そのためにも、佐藤先生や小川さんの取り組みを取材し続けるのはもちろんですが、他の自治体の取り組みもどんどん取材し、放送していくことがヒグマ問題をみんなのものにしていく上で必要なことだと考えています。

騒動が村の慣習も変えた

小川 確かに島牧村のハンター育成は政策として素晴らしかった。ただ、報奨金の金額設定に問題があったのではないのでしょうか。

幾島 出動一回あたり二万円、緊急時は三万

円と定められていました。

小川 確かにその金額は安くない。だから議員が反発したのかもしれないね。

佐藤 あくまで一回あたり二万円ですから、一日に何回も出動ということが発生し、報奨金が膨れ上がったのでしょうか。

幾島 そうした出動回数の方、緊急時の定義などについて、要綱上きちんと定められていなかったのは事実です。だからこそ、議会はそれを指摘したのですが、村としては悪意を持って説明しなかったのではなく、村の慣習として「このくらいなら説明しなくてもいい」と考えてしまったのが原因の一つにあります。

さらに言えば、村議会は公開が原則ですが、二年前のクマ騒動でいろんなメディアが島牧村に押し寄せ、議会撮影の要求がなされました。ところが、こうした申し出自体が今までなく、当初は断ったことで問題が大きくなってしまった。また、掲示板に制定した条例を貼っても、表紙だけで中身が見えないように貼ってしまった問題も、悪意があつてそうしたのではなく、島牧村ではそれが当たり前だったので。

小川 ともあれ、ヒグマ騒動が村のこれまでのやり方を見直すよいきっかけになったということですね。

幾島 そうです。今まで慣習的にやってきたことを条例として明文化し、住民みんなに周知、確認してもらわなければならぬよいきっかけにはなつたと思います。

ハンター報奨金を必要コストとして考慮する

押谷 先ほど、坂田さんが札幌では猟友会のメンバーはリタイアした人たちを中心に組織されていると説明がありましたが、島牧村の金額は妥当なのでしょうか。

小川 私は高いと思う。島牧村の近くで北海道電力による風力発電の計画予定があり、友人のハンターがその調査に同行したのですが、一日三万円だそうなんです。しかも、拘束時間は長く、ヒグマが出て撃つてはいけないそうなので、かなり大変だと言っていました。

佐藤 場合によりけりなのでしょうね。護衛だけで一日五万円としているハンターもいます。

押谷 佐藤先生は調査に行くとき、ハンター同行はしないのでしょうか。

佐藤 基本的に同行はありません。テレメトリ発信器の調査などで捕獲し、その段階でハンターに同行してもらう場合はありますが、それはボランティアとして同行してもらうので、お金を払ったことはありません。

押谷 クマを駆除する場合、熟練したハンターが必要だと聞いています。そうなると、二万円という金額が適正なのか。言い換えれば、いくらであれば適正な金額と言えるのかという問題が出てくると思うのですが。

幾島 島牧村の報奨金は近隣自治体より高かったのは間違いありません。ただ、村長は逆に他の

自治体が低すぎるという考えを持っていました。それは村が猟友会にお願いしてやってもらっていること、ハンターの数も減少傾向であることを考えれば、将来的に育成する必要もあること。また、ヒグマ出没によってケガをする人のほとんどがハンターであることを踏まえれば、報奨金を高めに設定しなければならぬという考えで政策を進めてきました。実際、島牧村の報奨金問題が出てきたから、近隣自治体で見習うところが出てきて、報奨金を引き上げる動きも出ています。

押谷 ハンターへの報奨金が自治体にとって当然のコストとして捉えるようになった、と言えるわけですね。

道が主体となってヒグマ対策を考えるべき

小川 ただ、市町村単独でヒグマ対策をするところが難しい場合もあるでしょうから、道や振興局が機動的に動けるようになればと考えているのですが、なかなか機能していませんね。

佐藤 実は振興局単位でエゾシカも含めた「エゾシカ・ヒグマ対策連絡協議会」の名称で、協議会は立ち上がっています。年に一回集まって、情報交換して終わりの状態です。道にはヒグマ管理計画があるので、協議会単位で実施計画を作るような流れとなり、そこに専門家が助言したりすれば力が発揮できる組織になると考えています。しかしながら、道の計画自体に地域ごとの実施計画がなく、評価の仕組みもありません。さら

に計画ではフィードバック管理と言っています。が、それをチェックして修正する流れもない。私は学識経験者として参加し、改善を求める提言しているのですが、何も変わりません。

坂田 石狩振興局も昨年度末にアクションプランができて、広域でヒグマ対策ができると思っていたのですが、現在は頓挫している状況です。

佐藤 その話で言えば、昨年問題となった野幌の事例を踏まえ、ヒグマの動きが少ない時期に広域連携を進めるべきでは、と担当者へアドバイスしているのですが、「道には計画があるので、出没时间には粛々と対応します」という返答で終わってしまいました。

小川 ちなみに、島牧村の騒動で後志総合振興局の動きはあったのでしょうか。

幾島 現段階では島牧村内の連携が崩れてしまっている状況なので、それが整い次第、黒松内町や寿都町などと協議会を作っていきたいと考えているようです。

佐藤 そうした協議会を作っても、実働できる人をどう確保するかが一番の問題です。

幾島 島牧村で協議会を作りたいと言っても、道から予算が出るのがネックになっている。道が示したモデルはあるのですが、それをどう進めて行くかについて道や振興局は手伝ってくれない。私はそこに疑問を感じています。

佐藤 恐らく、道は「予算がありません」で終わってしまう気がします。個人的には、振興局数より少し多い人数で構わないので、農業普及指導

員のようなシステムを作り、市町村や農家と連携できるようにすればヒグマ対策も変わると思うのですが、道にはそれを実現するための知恵を絞る雰囲気がない。地方独立行政法人北海道立総合研究機構の中にある環境科学研究センター（現・エネルギー・環境・地質研究所）で道南地区と道東地区に野生生物室ができたときには、全道七カ所くらいの同様な出先機関を作って、振興局と市町村の間をつなぐ役割を求めていたはずなのですが、二カ所の設置で終わってしまいました。

押谷 私たち北海道に住む者としてヒグマとの共存は避けられませんし、むしろそれがあるべき姿です。そう考えると、これからのヒグマ対策としては「ウイズベアーズ」がキーワードになると思います。さらに言えば、行動範囲が広く環境にも柔軟という生態を持つヒグマだからこそ、広域的な連携と対策は重要となってくる。道は広域自治体として、もっと積極的にこの問題に取り組んでほしいですね。今日は長時間にわたり、貴重なお話をうかがうことができました。ありがとうございました。これで座談会を終了します。

本稿は、二〇二〇年七月一三日に開催した座談会をまとめたものです。 文責・編集部